今週の為替相場見通し（2023年7月24日）

総括表			先週の値動き		今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	（円）		137.69 ～ 141.95	141.85	139.50 ～ 145.00
ユーロ	（ドル）		1.1108 ～ 1.1276	1.1124	1.1050 ～ 1.1350
（1ユーロ=）	（円）		154.87 ～ 158.03	157.71	154.50 ～ 159.50
英ポンド	（ドル）		1.2817 ～ 1.3126	1.2852	1.2500 ～ 1.3100
（1英ポンド=）	（円）	*	179.74 ～ 182.52	182.28	178.00 ～ 185.00
豪ドル	（ドル）		0.6723 ～ 0.6860	0.6732	0.6550 ～ 0.6900
（1豪ドル=）	（円）	*	93.78 ～ 95.79	95.43	93.50 ～ 97.00

（データ）先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1．米ドル

金融市場部　為替営業第一チーム　松木 悠馬

（1）今週の予想レンジ：　139.50 ～ 145.00 円

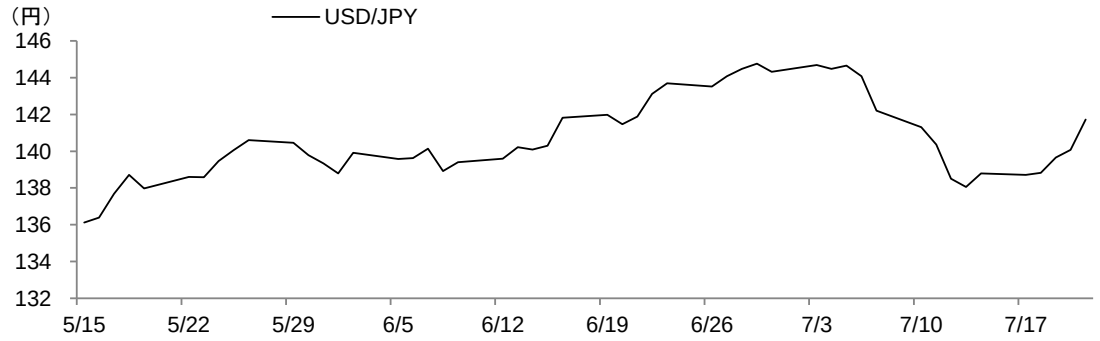
（2）ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は、日銀に対する政策修正期待の後退が円売り圧力となる中、米金利上昇も相まって141円台後半まで上昇した。週初17日、138.71円でオープンしたドル/円は、本邦休日の中、138円台半ばでじり安推移。海外時間は、米金利動向に合わせ上下も、結局はほぼ往って来いで引けた。18日、ドル/円は軟調な日本株を横目に138円台半ばへ下落。海外時間は、米6月小売売上高が市場予想を下回ると、米金利低下に合わせ週安値となり137.69円まで下押した。その後は米金利反転や植田日銀総裁のハト派な発言を受け、138円台後半を回復した。19日、ドル/円は日本株の堅調推移を受け139円台半ばへ上昇。海外時間は、円売り相場が続き140 円手前に続伸も、節目の140円を前に跳ね返され小幅に反落、139円台後半で引けた。20日、ドル/円は日本株の軟調推移や人民元高・ドル安に合わせ139円台前半に下落。海外時間は米新規失業者保険申請件数の強い結果を受け、米金利動向につれる形で140.50円に反転上昇した。21日、ドル/円は海外時間にかけ日銀関係者が現時点でYCC修正の必要性乏しいと見ているとの観測報道が伝わり、日銀による政策修正観測が後退すると、円売りが優勢となり141.95円まで急伸。その後も高値圏を維持し141.85円で越週した。

今週のドル/円相場は日米中銀会合の結果を受け動意づく展開を予想。週央に控えるFOMCでは+25bp利上げがコンセンサス。6月会合以降のパウエルFRB議長発言では年内2回の追加利上げを示唆するなどタカ派な内容となっている。ヘッドライン/コアともに市場予想を下回った米6月CPIを経て、なお足許では7月FOMCでの+25bp利上げは100%近く織り込まれている。前述したように今月のインフレ指標がディスインフレを示唆する内容となっており、結果以上に声明文やパウエルFRB議長発言等を通じて、FEDの今後のスタンスを見定める会合となりそうだ。他方、日銀金融政策決定会合では現状維持がコンセンサス。先週の植田日銀総裁の2%インフレ目標達成まで距離がありYCCのもと粘り強く金融緩和を続けていくとの発言からも現状維持の可能性は高いだろう。コンセンサス通り緩和姿勢を維持する場合にはドル/円ないしクロス/円で円売り圧力が高まるのが基本線か。発表される展望レポートの物価見通しの上方修正が見込まれており、今後の政策変更を見込むうえで注目材料となるだろう。もちろん、7月初旬にはYCC修正に関する記事が出るなど、YCCの修正ないし撤廃に関して一定の可能性はあり、その場合には円高リスクには警戒したい。

（3）先週までの相場の推移

先週（7/17～7/21）の値動き：　安値 137.69 円　高値 141.95 円　終値 141.85 円



（資料）ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部　為替営業第二チーム 鈴木 智大

(1)今週の予想レンジ:　1.1050 ～ 1.1350　　154.50 ～ 159.50 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

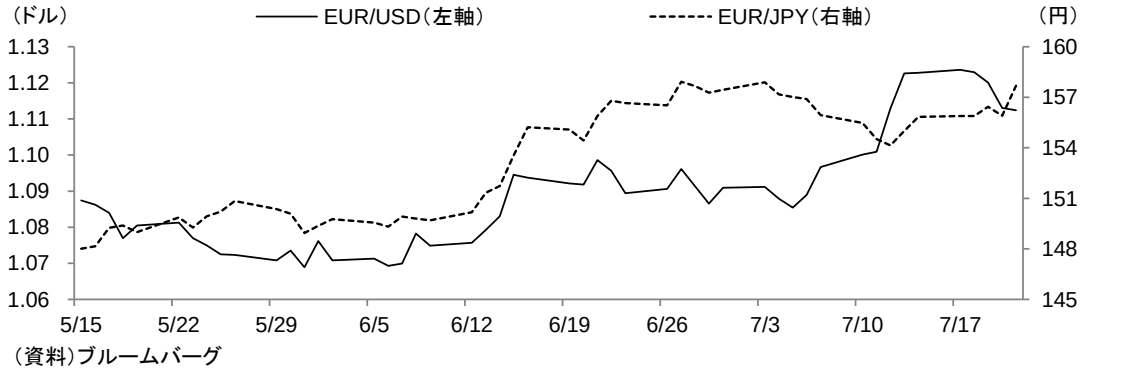
週初17日のユーロは1.12台前半でオープン。冴えない中国の経済指標の煽りを受けた欧州株安やナーゲル独中銀総裁の7月ECBでの利上げに言及した発言などがあったものの、強弱まちまちの材料に1.12台前半で方向感のない値動きとなった。18日は特段材料はなかったように思われるものの、じりじりと値を上げ一時週間高値となる1.1276まで上昇。ただその後のクノット仏中銀総裁のハト派色の強い発言や米6月小売売上高の結果を受けて、元の水準まで値を戻した。19日は英6月CPIが予想を下回ったことで大幅にポンドが売られる中、ユーロも連れ安となり1.11台後半まで下落。ただその水準で下げ渋ると、1.12台を回復してクローズした。20日は独6月PPIやユーロ圏7月消費者信頼感が予想比良好な結果となるも特段材料視されず。米金利の上昇を受けたドル買いの流れに押され、1.11台前半まで下落する値動きとなった。21日も軟調な推移がけいぞく。じりじりと値を下げ、一時週間安値となる1.1108まで下落後、やや値を戻した1.1124で越週した。また、ユーロ/円は「(日銀関係者が)現時点でYCC修正の必要性は乏しいとみている」といった趣旨の報道による円売りの流れを受けて、一時年初来高値となる158.03円まで上値を伸ばした。

今週は27日(木)にはECB政策理事会が予定されている。今回の会合での利上げはすでに9割程度織り込まれており、注目されるのは声明文やラガルドECB総裁会見での次回会合での利上げ意向および今後のインフレ見通しか。9月会合での利上げは、現状7割弱程度織り込まれてはいるものの、欧州各国の中銀総裁の発言には、今後の見通しについてばらつきがあり不透明感が強い。ただFRBはインフレの鈍化等を背景に、現状27日会合での利上げ、次回9月での据え置きがコンセンサスとなりつつある状況。単純なタカ派姿勢の持続性という観点から、ユーロは依然米ドルに対して強含む可能性が高い地合いにあること、コア部分を中心に粘着性のあるインフレ進行や実需の強さから来るユーロ買いのフローなどを勘案すると、仮にECBの結果によって下押し圧力が強まっても下値は限定的、再度ユーロの評価が見直され、底堅い推移になることを予想する。また28日(金)には仏、独など欧州各国の7月CPIの発表が予定されている、結果次第で大きくトレンド転換する可能性がある点には留意をしておきたい。

(3)先週までの相場の推移

先週(7/17～7/21)の値動き:　(対ドル) 安値 1.1108　高値 1.1276　終値 1.1124

(対円) 安値 154.87　高値 158.03　終値 157.71



(資料)ブルームバーグ

3．英ポンド

欧州資金部　中島　將行

(1)今週の予想レンジ:　1.2500 ～ 1.3100　　178.00 ～ 185.00 円

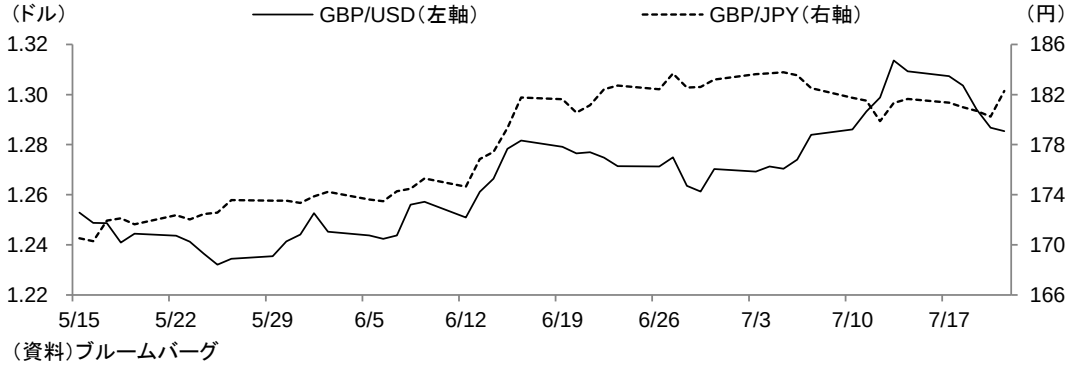
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンド相場は対ドルで約1.8%下落した。とりわけ、19日に公表された英6月CPIが市場予想を大きく下回ったことを受け、節目の1.30を割り込んでからの下落が大きくなった。対円では、ドル/円相場が週前半には140円を手前に上値を抑えられていたこともあり、ポンド/円も180円を割る場面が見られたが、その後、日銀の政策修正観測の後退とともにドル/円が140円を大きく超えて上昇したことを受け、ポンド/円も180円を回復した。英6月CPIは前年同月比+7.9%と、5月の同+8.7%から大幅に減速、市場予想の同+8.2%を下回り、過去1年3か月ぶりにインフレ率は8%を下回った。変動の激しい食料品やエネルギーを除くコアCPIの上昇率も前年同月比+6.9%と5月の同+7.1%から鈍化し、市場予想の同+7.1%を下回った。CPIの発表を受け、直後に英2年債利回りは20bp低下、2023年3月以来の大幅下落となった。また、市場が織り込むイングランド銀行(BOE)のターミナルレート(政策金利の到達点)もCPI発表後に6.0%を割り込み、21日時点で5.85%に低下している。7月6日時点では6.5%に達していた。21日に発表された英6月小売売上高は前月比+0.7%と市場予想の同+0.2%を上回ったものの、市場の反応は限られた。なお、先週はボリス・ジョンソン氏の議員辞職に伴う3つの補選が行われ、保守党は3つのうち2つの議席を失っている。2024年11月の総選挙に向けてスナク政権には逆風となる。

今週1週間は、26日(水)にFOMC、27日(木)にECB、28日(金)に日銀の金融政策決定会合を控える中銀ウィークであり、英ポンド相場も米金利の動向をはじめ主に外部要因で上下に振れることになりそうだ。とりわけ、FOMCで利上げ再開が実施されるか、9月会合での追加利上げの可能性が示唆されるかは、為替市場全体にとってインパクトが大きい。従って、英ポンドも外部環境次第、という状況になりそうだ。しかし、こうした外部環境の影響を除いたうえで、ポンド相場の上昇と下落のどちらかの可能性が高いかといえば、下落方向であろう。BOEの利上げ期待は急速に後退しており、現在では中銀が既に金利を過度に押し上げて経済に悪影響を及ぼしているのではないかという懸念が広がっているためだ。とはいえ、BOEの追加利上げ観測は根強く残ると見られることから、対ドル1.25のレベルではサポートされやすいだろう。BOEのラムスデン副総裁も19日のCPI発表後に「インフレは著しい鈍化が始まったが、CPIインフレは引き続き非常に高い」という見解を示している。G10主要中銀の中で、BOEが最もアグレッシブな引き締めが見込まれること自体は変わらないだろう。

(3)先週までの相場の推移

先週(7/17～7/21)の値動き:　(対ドル) 安値 1.2817　高値 1.3126　終値 1.2852
(対円) 安値 179.74　高値 182.52　終値 182.28



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

金融市場部　為替営業第二チーム　小林 元子

(1)今週の予想レンジ:　0.6550 ～ 0.6900　　93.50 ～ 97.00 円

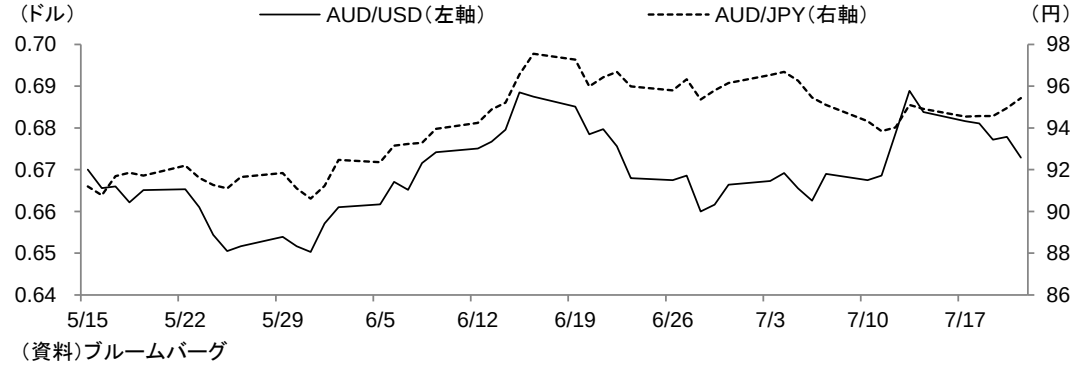
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、週央まで高値圏でもみ合うも、週末にやや下落。17日、豪ドルは0.6840近辺でオープンし、中国4～6月期GDPや小売売上高(前年比)、不動産投資等が予想比下振れとなると中国景気減速が意識され、軟調に推移。NY時間にイエレン米財務長官が「米景気後退は想定せず、労働市場は力強い」と述べると、ドル買いが強まり、一時0.6788まで下げる場面も見られた。但しその後、「中国の成長減速は米国にある程度の悪影響を及ぼす可能性もある」と語った事で、市場は米国の利上げサイクルが終わりに近づいているとの見方に傾斜。米国債が上昇(金利は低下)し、株が上昇すると豪ドルは0.68台に戻す展開となった。18日、7月RBA会合議要旨では政策金利引き上げも検討されたが見通しを巡る不確実性とこれまでの合計+400bpの利上げに伴う景気への打撃が懸念される中で据え置きとなったことが明らかになった。また、メンバーは8月の会合で状況を再評価する事で一致し、豪ドルは0.6789～0.6837の比較的ナローレンジでの振幅に終始し、結局0.6812で引けた。19日、人民元安となると豪ドルも徐々に値を落とした。ロンドン時間では英6月CPIの鈍化が発表され、英国債が上昇(金利は低下)しポンド売りとなる中、ドルに買いが集まり豪ドルも一時0.6750まで下落した。20日、豪ドルは0.6770でスタート後、予想を上回る豪6月雇用統計結果をうけて0.6840まで急伸。その後も一時0.68半ばまで上値を伸ばしNY時間まで0.68台をキープ。NY市場では米新規失業保険申請件数が労働市場の底堅さを示したことで年内の米国追加利上げ観測から米国債利回りが上昇し、ドル買いが先行し、豪ドルは0.68台を割り、結局0.6779で引けとなった。週末21日、豪ドルは、0.6780近辺で取引開始後、売りが優勢の展開に。今月末の日銀金融政策決定会合で金融政策の現状維持を決める公算との観測報道が伝わると、円売り優勢、米ドル買いの流れの中で豪ドルも頭を押さえられて0.6732で越週した。

今週の豪ドル相場は底堅い展開を予想する。25～26日でFOMCにて+0.25%の追加利上げが見込まれており、発表後には豪ドルが弱含むと想定されるも、先週RBA の7月議事要旨では、「+0.25%の利上げも検討」や、「一定の追加金融引き締めが必要になる可能性」との内容が確認され、ややタカ派の内容となった。また、発表された豪6月雇用者数の強い結果も確認されており、RBAによる利上げ再開余地への思惑が見られ、豪ドルの下支え材料となろう。今週は26日(水)に豪4～6月期CPI、28日(金)に豪4～6月期PPI、豪6月小売売上高等の発表が予定されている。

(3)先週までの相場の推移

先週(7/17～7/21)の値動き:　(対ドル) 安値 0.6723　高値 0.6860　終値 0.6732
(対円) 安値 93.78　高値 95.79　終値 95.43



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。